
【企画】とある創作の学園都市

こなつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【企画】とある創作の学園都市

【Nコード】

N4417X

【作者名】

こなつ

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の世界観で二次創作、つまりオリキャラだけで一から学園都市造っちゃおうぜ！という企画です。

オリジナル能力者同士を戦闘させて厨二病の血を騒がせたり、キヤラ座談会するだけの簡単かつ適当な企画ですので、オリ主二次創作小説が好きな方、禁書の世界観ちゅっちな方、禁書かじってて戦闘狂の方、文は書けないけど絵ならイケル！みたいな方、ぜひどうぞー！！

また、ある程度の縛りは存在するので、それを遵守できる方でお

願います。

募集期間は2011年10月9日から、管理人が飽きない限り延々と。

詳細説明【必読】

参加なさる方は必読！

ええと、まずこんな珍妙な企画なんぞに手を出していただいてありがとうございます。大ざっぱな説明はあらずじでしたとおりなのですが、こちらでは細かい説明をば。

とある創作の学園都市とは？

こなつが立ち上げた行き当たりばったりの企画です。オリキャラオンリー企画。主に戦闘シーンを書いたり書いたり、座談会も面白いんじゃないかなーなんて思います。あつ、『一から学園都市』というのはつまり、既存の能力者は一切居ないよ！ということになります。文は書けないけど絵なら描けるよ！という人でも大歓迎。描いて下さい、ぜひ。

参加資格

一切不問です。年齢も関係ございません。

ただ、マナーを守ればそれでいっこうに構いません。

参加方法

こなつ 「ID：113338」 こちらのIDにメッセージを送ってください。

件名に『企画参加』とか書いていただけるとありがたいです。

下記のテンプレをコピーして貼り付け、必要事項を記入してください。

氏名：

ID：

確認した後、こちらの方から小説の投稿方法などを送らせていただきます。

もしわからないことがあればご一報を。

えー、それではいよいよオリキャラ登録方法を。

募集人数

一人5人まで登録可能です。もちろんそれ以下でも構いませんが、どれだけ多くても5人です。

能力の強さ

募集する能力者は、レベル5は6人（あと1人は管理人が登録するので）、それ以下は何人でも可です。

もちろんレベル0でも構いませんが、戦闘企画だということを覚えておいてください。今更ですけど座談会（ry
レベル5の席が埋まってしまったときはご報告いたします。

禁止事項

最強設定は原則無しとします。天下のレベル5でも、必ず弱点等を用意してください。

能力の内容については完全オリジナルでも、禁書本作から拝借しても構いません。ただし後者の場合、レベル5の能力を引用するのは禁止とします。

登録用テンプレ

参加表明のメッセージにコピーし、やはり必要事項を記入してくだ

さい。

【オリキャラ登録】

名前：

性別：

年齢：

レベル：

能力名：

能力内容：

容姿：

性格：

複数の場合はその人数分お願いします。また、能力内容に弱点なんかを書いていただけると嬉しいです。

座談会・雑談について NEW！

だいふく様より、チャットルームをお借りしております。ぜひぜひご活用くださいませ。ただし、参加している方優先的にお願いします。

URL：<http://9413.teacup.com/kamachi/chat>

座談会に関しては、日時等は管理人の方で指定する形が多いかと思っています。指定は活動報告等ですのでチェックお願いします。

タイマンで語りたい！なんて人が居りましたら、それは各自こそこそ：というか、各自で連絡しあってくださいな！

長々と並べましたが、大丈夫でしたでしょうか？

如何せん企画を立ち上げるのは初めてのことなので、戸惑っていましたが、お付き合いくださると嬉しいですよ。

10月14日、ちょっと改定です。 / 11月22日、事項を増やしました。

登録キャラクター名簿

登録された能力者の名簿です。

あゝわの順で並んでいます。

【asuta様より・ID157665】

名前：阿頼耶家康あいやいえず

性別：男

年齢：18歳

レベル：5

ブレスシャースペース

能力名：圧殺空間

能力内容：半径100m以内の圧力を操作する力。空気圧を操り物体を潰す、殴った時にかかる力を操り強化する、地面を蹴り上げる圧力を強め高速移動、圧電気によるレベル3クラスの電撃、圧力を使った電気抵抗を作り出す防御、圧力操作による真空の作成、内臓破裂がおきる程の空気弾攻撃などが可能。

また、能力がなくとも、彼には、信号機を叩き折って投げ飛ばす腕力、新幹線に追い付くスピード、トラックに跳ねられても無傷で生還する耐久力がある。

また、圧力操作で対処出来ない精神操作系の能力者、空間移動系能力者の体内への物質転移（内臓にナイフを突き刺されても平気だったりするが）等が能力自体の穴となる。といっても、後述の特異体質でカバー出来ている。

容姿：切れ長の目に、目の下に施したコウモリのタトゥー、後ろ髪の毛先をショッキングピンクに染めた茶髪が特徴な、the Gazetteの流鬼似の目立つ外見の美形。さらに、スカイブルーのタンクトップに、鯉が描かれたジーンズ、鎖で繋がれた銀色の

ヒトデ型の首飾りと、ファッションもとにかく目立つ。さらに、身長が199cmとデカい。体系は細身な方。

性格：能力者を（自分も含め）ある理由で嫌悪し、反対に無能力者には困難が降りかかれば体を張り、命をかける。傲慢で、馬鹿で、直情的で、キレやすいが、底抜けに優しく仲間思いで、後輩や後述のスキルアウトの新人にとっては面倒見のいい兄貴。また、アニメ好きで、ボカロ好きという、なかなかオタクな人。眼鏡っ娘好き。一人称は俺。二人称は

能力者と無能力者を狙うようなスキルアウトしか食い物にしない、最低最悪最強と評されるスキルアウト『チーム』のリーダー。掲げる目標は、『学園都市が無能力者にとって安全で、能力者にとって危険な街にすること』。スキルアウトなのでアンチスキルに何度もお世話になつては、牢屋を壊し脱獄している。

また、彼は嗅覚が異常に鋭く、AIMの匂いも嗅ぎ分けることが出来る。これで能力者の種類や、レベルが分かり、この特異体質で能力者がそうでないかを分けている。また、これはかなり正確で、能力者が演算をし、能力を発動するタイミングまで分かる。これを使い、自分の弱点となる種類の能力を持つ能力者が能力を発動する演算のタイミングに、攻撃をいれ妨害する戦法をとる。

【ユーシン様より・ID172033】

名前：茨野 いばの アゲハ

性別：女

年齢：18歳

レベル：4

能力名：超進化論 テンベスト

能力内容：遺伝子操作系能力者で、遺伝子を歪め、新種の植物『茨野新個体』を造る。動物にも通用するがかなり危険な作業なので自分にしか行っていない。『茨野新個体』の何種かは神経があり茨野の背中に造ったアクセス部分に接続し手足のように振るうことができる。

容姿：木の幹のような色で、腰まで伸びるロングの糸のように細い髪と、手足に鎖付けて引きずっているような歩き方が特徴的。眠ってしまいそうに見える目つきで、唇は色も厚みも薄い。背中を中心部分は円盤を埋め込んだように変形しておりここで脊髄に『茨野新個体』をつなげている。服装は黒が多い。

性格：基本的には自分が住んでいる植物園で植物の世話をしており、人には興味なさげに見えるが、常連や知人には声を掛けるなど他者を遠ざけている訳ではなく、騒音や雑音を発するモノを嫌っている。口調は上司のような命令口調で一人称は私。

【アポリオン様より・ID121225】

名前：岩見祥吾 いわみしょうご

性別：男

年齢：27歳

容姿：いつもシンプルな形の般若の仮面（口の部分が開いているので、つけたまま飲食も可能）を着用しているが、外すと火傷の跡（家が放火された際に左眼辺りを火傷）があるものの意外に整った顔立ちである。その醜い傷を隠すため、仮面をとろうとしない。取ろうとすると例え誰であろうと、極めて冷酷で殺意に満ちた目で威圧する。身長は174cmぐらい。後の特徴といえば、黒のビジネス

スーツ、白い汎用手袋と黒色の革靴ぐらいか。

職業：必殺仕事人

性格：人と接するとき、愛するか殺すか無関心かという極端な感情しか持てない。基本的に好戦的で、感情の赴くままに多くの人間を理由なく殺害し、数多くの人物から「人間じゃない」とまで称されている。その生い立ちから銃を持つ警官複数を生身で倒すなど、戦闘能力も極めて高い。その暴虐さゆえ「射殺止むなし」とまで言われている。

家族が殺害されて以降は、「泥を食ったことがある」と語るなど浮浪者のような生活をしてきたらしく、その名残からかトカゲを焼いたり、生卵数个をコップに割って一気飲みしたり、ムール貝を殻ごと食べたり（噛み砕いたが飲み込み切れなかった貝殻の破片は流石に吐き出す）と、人間の域を超えた悪食ぶりを見せる。しかし、最近では学園都市に住居を持っているせいか、自宅周辺のコンビニを強盗し、食料や生活用品などを大胆に盗ってきている。時々、スキルアウト達から殺して奪った札や硬貨を強盗した店に代金として置いてきている。

また途中で辞めているとは言え、高校や仕事をしていた事もある他、自動車を運転する際はちゃんとシートベルトをし、焼きそばを食べる際はお湯を捨てるなど意外と律儀なところもある。そして意外にも女性や子供には優しい。でも、あまりに身勝手・理不尽・ふざけた人だとイライラして殺そうとする。

案外好きな人には尽くす性格で、タイプの女性と一緒にいるときはイライラもなくなってくる。その人が危険に陥るなら自分の命を顧みずに助けにいたりもする。基本美人であれば仲良くなるうとするが、性格がわがまま・高飛車・イラッとするような言動などあれば脅して態度を改めさせようとし、相手に対するイライラが一線を越えれば殺そうする。インデックスあたりが危ないかもしれない。

特に無理難題でもない限り女性の頼み事は基本的に聞く。理由は「好かれないから」であり、これは幼い頃に家族が殺されてしまい、愛されることがなくなってしまったからだと考えられる。

上記の通り男性に関しては基本「殺す」対象ではあるが、心を開いた者は例外であり、食事に誘うほどにまで仲良くなることが可能である。ちなみにサディスト。酒には強く、酔った奴を着にするレベルではあるのだが、自分からは飲む事はなく誘われた時のみである。お酒はあまり自分からガバガバ飲むタイプではなく、誘われたら飲む、というより誘われたら大抵の事は快く乗ってくれる。特に美少女のお願いなら尚更。ノリはいいほうである。でも、性格が酷い場合はキツパリと断る。超能力への関心は殺すが面倒になる程度。魔術に關しての知識は全くの皆無である。

20年前に無差別放火魔によって住んでいた家と家族を失い、復讐の為に自分もまた無差別殺人鬼になるという過去を持つ。現在はもちろん全国指名手配犯である。ちなみにすでに仇である放火魔は自身の手で殺害済みの様子。何度か政府要人暗殺請負人「死神」として殺人をよくやっており、その他には密偵のお仕事も数回行い、その際の成果は上々のもの。そのどちらも気まぐれでやっていたように、報酬は現金、しかも持ち運べる量と依頼人に釘を打っていた。現在は第10学区のボロいアパートの住民を皆殺しにし、その一室に住んでいる模様。コンビ二強盗やスキルアウトの虐殺をしている。目的のために他人を幾度となく騙して利用するなど、頭も非常に回り戦闘時にもその傾向がみられる。

身体能力：膂力に関しては、並みの能力者を圧倒するレベルである。戦闘力を能力者レベルで表すと、軽く見積もってもレベル4上の上クラスに相当し、最悪レベル5上の中クラスであると噂されている。刀を主に使うが我流で、「斬る」や「突く」というよりは、「叩きつける」といった豪快な力押しでの戦闘を好む。そしてこれが通用しない場合は、抜刀術や突き技にすぐさまシフトする。瞬発力や短

距離の移動速度については武術を極めた人間でも見切るのは難しい。長期戦も苦手ではないが、面倒なので避ける傾向がある。常に戦いの中に身を置いていたため、眼光が鋭く、大抵の者はこれを見るときはしばらく動けなくなる。ちなみにこの眼力、リラックスしている時は緩む。身体能力に関しては、一般的な常人のそれとは比較にならないほどに高い。西洋刀なしでの戦闘を行うことも可能で、どこで学んだのかは不明だが、主に拳法を使う。（殺しを目的とする戦闘を行う場合、決まって「イライラするんだア・・・！」という言いながら、首を回すという癖を持つ。）

一人称及び二人称は俺、お前又は相手の名前
何だかんだ言って、可愛い女の子には甘い。

好みのタイプは性格は従順で髪型はボブカットに近いもの。それ以外は特にこだわっていない。（胸に関しては特に選別基準ではないが、どちらかというと大きい方がいいらしい。）五和のような子が好きの様子。次にオルソラや佐天らしい（佐天はボブではないが、性格が気に入る模様）。年齢で考えると中高生が好きで、熟女や人妻は嫌い。

通称死神。名前の由来は上記のような外見に加え、容赦のない連続無差別殺人が原因だと思われる。活動範囲は学園都市全域。そして神出鬼没。が、戦いが起こっている場所には血の匂いを嗅ぎつけて高確率で現れるようである。

【だいく様より・ID191002】

名前：朧江相馬
おぼろえそうま

性別：男

年齢：17歳で高二

レベル：0

能力名：能力記憶

能力内容：無能力は勿論、超能力まであらゆる能力の影響を受ける
と、その能力の「自分だけの現実」を記憶して、時間制限付きで一
度だけ使用する事が出来る。

能力が強いほど時間は短くなる。

この能力の解説をすると、朧江は自身の「自分だけの現実」を自分
の意思で使用する事が出来ず、他の能力の影響を受けた時にその「
自分だけの現実」を上書きすることでその能力を使用する事が出来
る。

そのため身体検査では無能力者判定とされている。

ストックは多数あり、知り合いに発火能力者がいるため頻繁に使う
ものは強能力の発火能力。

能力の影響を受けると言うことは能力による攻撃を受けなければな
らないということなので、能力を記憶するときは必ず一撃喰らわな
ければならない。

容姿：身長は171cmほど。

中肉中背で髪は前髪は眼が軽く隠れる程度、サイドも耳に少しかか
る程度で後ろ髪は少し長めの黒髪でところどころ寝癖がある。
美形と言う程ではないが顔は整っている。

性格：クールと言う程ではないが落ち着いている。

正義感が強く、人を助けることもしばしば。

一人称は俺で、口調は上条が落ち着いた時みたいな喋り方。（僕の
書いた小説を見ていただければ分かりやすいと思います）
恋愛に関しては全く興味がない。

【オウニンポヤ様より・ID174538】

名前：風祭 涼 かざまつり りょう

性別：女

年齢：14歳

レベル：5

能力名：大気支配 エアリアル

能力内容：元々はレベル1の空力使い（エアロハンド）であったが、事故で視力を失ったことでそれを補うために大気感知能力が急激に拡大し、レベル5の大気支配へと進化した。

戦闘にあつては突風やカマイタチといった空力使い（エアロハンド）一般の能力のほか、

1・気圧を操作することで相手を押し潰したり、低酸素症（高山病）に陥れる。

2・大気中に含まれる水蒸気を摩擦させ発電、落雷を起こす。

3・身に纏った水蒸気で光を屈折させ透明化する（本人が可視光を捉える必要がないため完全透明にもなれる）。

4・気温を操作し燃焼・冷却（凍結）させる。

5・窒素を操作しての窒素装甲を身に纏う。盾として板状に展開することも可。

6・大気の動きから周囲の状況を把握できる。本人は視力が無いものの、この力で目視以上に周囲が視えている（大気の動きを演算し、画像として処理している）。側面・後方も感知しているため、基本的に死角はない。

7・風を操作し飛行が可能。

など、大気そのものを武器とする。

本人は6の能力を使い周囲を完全に把握しているものの、どうしても視覚より反応が一步遅れてしまったため、接近格闘戦を苦手とする（そのための窒素装甲である）。

そのため、相手との距離を取り、（繊細な戦い方が出来ないわけではないがこちらの方が簡単なので）ごり押しの戦い方を専らとす

る。

容姿：150cm、40kg。

明るい茶色の髪で脛まで届く長いポニーテール。目も同じ色だが、盲目のため光がなく無機質な印象を与える（御坂妹に類似）。

常盤台中学に在学のため服装は常に制服を着用。

能力で周囲を把握できるため無くとも全く支障はないが、白杖を常に持っている。

性格：口数は少ない方で通常はおとなしい。しかし「盲目」という禁忌に触れた場合は豹変し、相手を殺すことも躊躇しなくなる。豹変モードでは全く喋らなくなり、周囲の空気が瘴気化するようなオーラを放つ。素直に謝れば「一応は」許すが決して忘れず、機会があれば報復する。一人称は「ウチ」。

【瀬河ナツ様より・ID136851】

名前：坂崎和華
さかざきかずは

性別：女

年齢：15歳

レベル：4

能力：痛み分け（ダメージセパレート）

能力内容：自身が受けたダメージを相手にも与える能力。相手の名前さえ知っていれば発動するが、与えた本人にしかダメージは返せない上に、名前を知らないとダメージは返せない為少し不便な能力。ただし、和華本人が自分を傷つけた場合のみ、ダメージを与えたい相手全員にダメージがいく。

容姿：黒髪で目が隠れてしまう程前髪は長く、後ろ髪も腰くらいまであり、目の色は赤、身長は普通です。私服は暗い感じの服オンリーで。

性格：基本的に暗くて引つ込み思案。例外として秋風（以下参照）にだけは明るい（が引つ込み思案なのは変わらず）自分の友達が傷つけられると、とても残忍な性格になる。

どーでもいい補足、何気に身体能力が高い。普段から藁人形をデフォルメにした人形『ウラミー』を持ち歩いている。

【管理人より】

名前：細波 さなみ むつき 六月

性別：女

年齢：16

レベル：1

能力名：衝撃貯蓄 ダメージカウンター

能力内容：受けたダメージを好きなときにエネルギーとして放出できる。ただしレベル1のため、ダメージを受ければ痛いし長時間エネルギーを溜め込むことができない。使い勝手の悪い能力ともいう。

容姿：ぼつさばさの赤い髪に、よれよれのセーラー服を着ている。目の下の隈は濃く、正直妖怪にしか見えない。ストレスをそのまま具現したような人。身長164センチ。

性格：かなり自虐的な人。被害妄想が強い。ただ足が常人より速いことだけが自慢らしい。戦闘は大抵「いいよどうせあたしをいじめて楽しむんでしょいいよやればいいよ」みたいなノリで受けてくれ

る。喋るときは一気に喋る。どんなに長くても息継ぎ無し。一人称は『あたし』。

【灰空様より・ID185419】

名前：守道途鷹すどう みちたか

性別：男

年齢：18

レベル：5

能力名：元レベル3「頭上注意」改造後「パーフェクトテレポート完全移動」

能力内容：触れたモノは当然の事、彼の能力は視界の中に移っている者すべてを自在に動かす事が出来る。

ただし本来の使い方では自分の体の周りに薄く触覚を作っており、それに触れると同時に接触箇所を含めた直径30cmの円状に挟れて、挟られて消失したモノごと11次元を経由して上空にテレポートする。

自身をテレポートしながら周囲にある武器になりそうな物を使って攻撃してくる。

容姿：

いつもくろーい制服に雨カップを被りを着ている
目には生氣はなくマスターからの依頼がなければただの人形にすぎない。

性格：テレポーターの弱点である感情や痛覚は脳を改造する事で完全に除去されている。そのため暗算のミスなどはない。変わりに感情はほとんどない。たたくもくつとターゲットを追い詰めて殺すただし、彼も人なので皆から波状攻撃+フルボッコされたら死にま

す。

【管理人より】

名前：竜守綾季 たつもり あやき

性別：女

年齢：14歳

レベル：5

能力名：万有引力 アトラクタ

能力内容：あらゆる引力を操作する能力。正確に言うと、物体と物体の間に存在している引力を強めたり弱めたりできる能力。質量さえあればそれは可能だが、綾季の視界に入っていないかったりすると操れない。（自分を軸にして周りに干渉することは可能）つまり効果範囲は綾季の目が届く範囲。光や音、熱などは質量を持たないため操れないが、大気中の水蒸気や何やらでどうにかしてしまう。質量の限界は水素レベルの小さな分子から、クジラさんだって大丈夫。電子同士の引力を操り、電磁波を発生させることも可能。攻撃に使えるもするが、逆に電気を打ち消すことも可能。超電磁砲は打ち消すことができる。万能な能力である。

容姿：身長148センチ。肩までの青みがかった黒髪を無理やりポニーテールにしている。万年半袖短パン少女。

性格：基本荒事は好まない、というか大嫌い。戦闘になっても第一に逃げることを優先するような子。普段では負けず嫌いだったりするけれど元気娘。というか聖母。一人称は『綾季』。「喧嘩っ！？だ、だめだよだってそんなことしたら……痛いよっ！」「みたいなことを言って相手の神経を逆撫でさせるのが得意。ただし無自覚だ

けれども。

【a s u t a様より・I D 1 5 7 6 6 5】

名前：テレサ（大王命名）

性別：女

年齢：（大王の見立てでは）17歳

レベル：測定不能

能力名：聖人（大王の見立てが正しければ）

能力内容：言わずと知れた魔術サイドの人間兵器。10階建てビルを片手で粉砕する怪力と戦闘機に生身で追いつく機動力、タンカーを頭上から落とされても死なない意味不明な耐久力を有し、4メートルの巨大なチェーンソーと、ガトリングレールガンを武器に戦う。なお、魔術について知らないため、魔術は現時点では使えない。弱点は、物理攻撃の通じない相手（一方通行など）。また、弱点とも言えないが、彼女よりも高い身体能力を有する相手（レベル5クラス肉体強化系や、自分より強い聖人）には勝てない。

容姿：ウェーブのかかった白く長い髪と、生気の抜けた真つ赤な瞳が特徴的な大人っぽい美少女。ヨーロッパ系な顔立ちをしている。

（大王の見立てはスペイン人）メイド服を着用。

性格：大王の命令に忠実。機械のようなしゃべり方と、思考をしている。大王に言わせれば『幽霊みたいで気持ちが悪い』。だからテレサ（マリオに出てくる幽霊）と名づけられた。

大王がとある研究者からある情報の提供料代わりに貰った、ボディガード兼メイドロボ。だが、学園都市の技術でも、このレベルの人型ロボットは作れないため、大王は『聖人の少女の記憶を無理や

り抜いて人形にした結果』と考えている。大王の仕事の手伝いや、彼の趣味に必要な物品（重火器や、違法薬物）の運搬、彼の趣味の後の事後処理の一部（死体の隠蔽など）、さらには食事などの身の回りの世話もしている。

【ニシン様より・ID132268】

名前：東城時人とじょうときと

性別：男

年齢：16

職業：風紀委員第一七七支部所属
ジャッジメント

レベル：レベル0（能力というよりは特異体質）

能力名：名前をつけるとしたら身体調律

能力内容：筋力から視力、聴力などの五感挙句は自然治癒力の活性化などの身体に備わってるあらゆるものを任意で上昇させる事が出来る。使用の際には左目が碧く染まる。蹴りでコンクリートを砕いたり、至近距離からの弾丸を回避したりなどが可能となる。がその分身体への負担も大きく長時間の使用や連続での使用は危険。目安として左目から出血 身体が動かなくなり行動不能となる。また左目から症状が現れるため左目が使用不可になり死角にもなる。その為長期戦になればなるほど不利になる。

基本的には上記の体質？能力？と常に持ち歩いている刀（能力を斬る事ができる特殊な刀）を用いた近接戦闘が得意である。

容姿：黒い瞳に程よい長さの黒髪で中肉中背の見た目ごく普通の高校生。

性格：世話好き、お人好し、家事が好きという主夫特性を持った典

型的なお人好しキャラ。滅多にキレる事は無い文キレとかなり怖いらしい。常に周りに気を配っているため状況把握能力も高く特に慌てることは少ない。

【asuta様より・ID157665】

名前：永松大王

ながまつおおきみ

性別：男

年齢：15歳（高校生）

レベル：4（書類上）

リキッドソウ

能力名：断頭奔流

能力内容：水流操作系最強の能力。最大速度マツハ16で、操作できる重量の限界は5.2t、操作範囲は自身を中心とした半径25M、1Lの水で軽自動車を持ち上げるかなり強力な能力。さらに、水の状態の変更（固体・液体・気体・プラズマに変更可能だが、プラズマだけはかなりの演算能力が必要で、使うとかなり疲れ、1週間は歩行不能。さらに、体重が3キロ減る）はもちろんゲル状や、ゼリー状にすることも出来、水の純度の操作はもちろん、なんと水の硬度まで操ることが出来る。一方通行や絹旗のような、無意識下での防御が可能（鋼鉄並の硬度の氷を相手の攻撃に合わせ、自動生成する）得意技は自身の通り名である、ウォータカッターの原理で敵を斬りつける断頭奔流。また、純粹を生成できるので、電撃使いに対して滅法強い。

容姿：短い前髪と、長いもみ上げが特徴的な黒髪、琥珀色の瞳の、人懐っこい印象を受けるやや童顔気味な見た目。『面白いこと』をしている時や、情報屋としてはたらいっている時は、瞳が切れ長になり、実年齢より年上に見られる。筋肉はほとんどない虚弱な体系。

身長170cm、体重51kg。

性格：普段は見た目通りの、人懐っこい明るい少年。だが、裏では自分の退屈を埋めるためにおもしろいことを探し、その実行と成就のためなら人の命も、情も、夢も、目的も、何もかも踏みにじるイカれた思想を持っている。一人称は学校生活は『僕』で情報屋モードは『ボク』になる。

『面白いこと』を探し、色々な情報を仕入れている。学園都市において、彼が知らないことはなく、学園都市が出来た理由、つまりは統括理事長の目的も把握しているらしい。情報操作の技量も相当で、『レベル5にランクインすると目立ったことが出来なくなってしまう』として、自分のレベルを4にしている。つまり本来の実力はレベル5。ハッキングが得意。また、情報獲得のためにスキルアウト、暗部組織、風紀委員、学園統括理事会などにコネがある。必要悪の教会ともつながりがあり、魔術世界についてもそれなりに詳しい。以上の能力を生かし情報屋を営み、『面白いこと』をするための資金や、それに必要なものを得ている。

彼の弱点は極度の運動音痴。『のび太より足が遅い』、『重量上げのバーも持てない』、『ボーリングのアベレージは2』など様々な伝説がある。その弱点を、『皮膚の上に薄い水の膜を張りそれを操作する』ことで、超人的な身体能力に見せることでそれをカバーしている。

所属は長点上機学園で、結構まじめに通っている。

【瀬河ナツ様より・ID136851】

名前：藤斑秋風
ふじむらあきかぜ

年齢：15

性別：男

レベル：3

ショートサーキット

能力：欠落回路

能力内容：相手の能力を一時的に封じる能力。本人のレベル以下の能力者にはかなり有効だが、レベル4、5には最大一分が限界、その気になれば封じられていても能力が出せる（ただしその場合はかなりの激痛が頭を襲う）、一度使うとしばらくは同じ相手に使えないと微妙な能力。

容姿：金髪（染めてます）に赤い瞳で背は高め。カラーコンタクト 服装はヤンキーみたいなちよつとガラの悪いファッション。

性格：ぶっきらぼうだが根っこは優しく友達思い。和華を大切に思っているらしく、和華が傷つけられるとブチキれる。

どーでもいい補足、喧嘩は滅法強い。普段から怨霊？をデフォルメにした人形『ノロイ』を持ち歩いている。

【管理人より】

名前：二葉 ふたば 真雪 まゆき

性別：男

年齢：17

レベル：3

テレポート

能力名：瞬間移動

能力内容：知つてのとおりなので書きやすいかと。ただレベル3なので、自身の転移は出来ない。戦闘スタイルとしては手持ちのものを何でも使っちゃう人。シャーペンでも定規でも彼にとっては武器になる。相手の身体に転移させることができるが人体の中心はどう

しても座標がずれるらしい。四肢を最初から狙う人。

容姿：身長176センチ。黒髪短髪。毛先は少しはねている。ヘアピン装備。いつもはブレザーの制服を着崩している。文房具一式INブレザー。

性格：いわゆるクソビッチ。虐められたら虐められたその倍だけボコボコにしたくなるなんていうDMでDSなわけのわからない人。一人称は『俺』。

【ユーシン様より・ID172033】

名前：不破 飛鳥（フワ アスカ）

性別：女

年齢：13歳

レベル：2

アドバンスワーク

能力名：身体強化

能力内容：自身の身体能力を外側から補強する能力。反動を相殺、反射速度や傷の回復速度の高速化、握力、脚力増加など。

演算を無意識下で行っているため開発による成長は見込めないが、実戦での上限は未知数。基本は黒いバットケースに入れている木刀を振り回し戦う。

容姿：紫を少し混ぜた黒に絹のような髪質、長身で健康的なスタイルの良さを持っている。服装は動きやすいTシャツ短パン、制服など。

性格：モデルのような外見だが、内面は子どもっぽく素直で活発な

柵川中学の二年生の関西弁少女。一人称はウチ。

活発ではあるが、指示する側ではなく、必ずされる側であり、自分から行動しない受動的な性格でもある。能力の影響で運動神経が優れているが、演算を無意識に行っているらしく、勉強面に応用できないので成績は平均程度。経験値獲得のため、闘いは申し込めば断らない。肉体派と闘いたい人はどうぞ。

【管理人より】

名前：光谷 みつたに 桜 さくら

性別：男

年齢：13

レベル：2

能力名：立体映像 ホログラム

能力内容：相手に物体を見せるように錯覚させる能力。それだけ。直接的な攻撃力はない。戦闘時はがむしゃらに使って合間を縫ってハンマーを振り回す。そのハンマーも普通の日曜大工用のため大きくもない。

容姿：普通に少年。栗色の髪を短くしている。身長153センチであまり高くない。普段はどういうわけだか作業服を着ている。

性格：究極のビビリ。不意打ちされたらとりあえずハンマーを振り回す。怖いことがあるととりあえずハンマーを振り回す。ビビリのお陰か異様に感覚が鋭い。まあまあ書きやすいんじゃないかなあ。一人称は『僕』。

【管理人より】

名前：ライエ

性別：男

年齢：16歳

レベル：4

能力名：絶対排斥^{レジスタント}

能力内容：物体と物体の間に存在する斥力（物体同士を退け合う力）^{アトラクタ}を強めたり弱めたりする能力。綾季の万有引力と対になる能力といってもいいかも。ただこちらの方が若干精度が落ちる（分子レベルでの操作は不可）上、効果範囲が綾季より狭くなる。70メートルが限界。戦闘時は釘を使用する。斥力という概念がおぼろげなため、能力自体はわりと稀。

容姿：真っ直ぐの金髪に碧眼。例えでいうならガラス細工。ハーフらしいけどファミリーネームを明かしていないため定かではない。身長168センチに釣り合わない体重。

性格：無関心。とにかく無関心。自分に関係しなければ基本大人しいが、面倒ごとになるととりあえずぶつ潰そうかな、という気持ちになる。（使うかわからないけれども綾季厨設定がありまうわなに
するやめ）無意識厨二病。一人称は『俺』。

イラスト展示

絵で参加してくれた方々の絵置き場です。ありがとうございます！
まあ現時点で管理人一人ですが；；

こちらもあるゝわ順で並べられています。

ユーシン様より・茨野アゲハ

BYこなつ（管理人）

>i33121—2161<

みてみんURL http://2161.mitemin.net
t/i33121/

（サンプルがてら描いたものです。誰だコレになりました； 申し訳ありませんユーシン様！あとアゲハちゃん！ 一応テンペストの綴りはあつてゐる！はず！です！多分！！）

管理人より・竜守綾季／ライエ

BYこなつ（管理人）

>i35614—2161<

みてみんURL http://2161.mitemin.net
t/i35614/

（所謂落書きですが…。我が家の綾季ちゃんとライエ君！ のアゲ

ハちゃんとはおっそろしくタッチが違いますが同一人物です。こっ
ちのタッチの描き慣れてはいますね！。紫大活躍でした！

随時追加予定です。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜（前書き）

サンプルにするため書いたものです。参考になれば幸いです。多分
ならないです。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜

肌寒い風。淡く輝く月。擦り寄る黒猫。静かな大公園。冷たいベ
ンチ。湯気のたつホットココアの缶。

それから、

「ぎゃあああああああ！！！」

劈く悲鳴。

あたしは放心の先の虚無の世界から無理矢理意識を引っ張り起こ
し、苛々と声の方を睨んだ。

「ちよっ……！何コレ！何なのコレ！何でこここんなに猫多いんだ
よおおお目光って怖いんだけどおおお！！！」

愛しのマイフレンズに何を言うか。声の主は情けない悲鳴を続け
様にあげながら、こっちに向かって突っ走って来る。背丈はあたし
以下、それから肝っ玉のサイズもあたし以下。どういうわけだか作
業服を着て、手にはコンビニの袋を提げていた。

そいつはあたしの目の前で急に止まって、今にも泣き出しそうな
声色で言う。

「その人！助けてくださいここは化け猫の巣窟です！！！」

「……」

「……あ」

そして、今度は半泣きの聞き取りにくい声で、

「ぎゃあああああああ！！猫娘ええええええ！！！」

「うっさいなもう猫娘とかこの鬼太郎だようせあたしは猫と戯れるのが好きな根暗だよ！！！」

思わずそう怒鳴った。失礼なことを言われた怒りと、あたしの持つ負のスキルの一つ被害妄想が炸裂する。

「いやあああああもしかして僕いつの間にやら猫の王国にトリップしてたのおおお！！？ひいひいひいお助けください王女様ああああ」

「うるさい黙れ耳が痛い！！！」

「ひッ！」

泣き喚くプチサイズ肝っ玉（今命名）はあたしに怒鳴られ萎縮した。面倒くさい奴だ。余計にストレスが溜まる。

「…名を名乗れ」

「あ、あの、もしかして変な契約書に使ったりするんじゃないか」

「家に帰ってたかったら名乗れって言ってるんだよ変なこと気にしてんじゃないよこのプチサイズ！」

「は、はい！！！！みったにさく光谷桜ですう！！！」

何だ、女々しい名前だな。思ったことは言わない性質なので口には出さない。桜は既に半泣きで硬直していた。対するあたしはベンチで体育座りをしたままである。何だこのシュールな光景は。

あたしたちを包むシュールな雰囲気能耐えられなくなり、あたしは立ち上がった。桜は「ひッ」と怖気づいて後ずさる。立っただけでその反応はビビリすぎだろう。

「…桜はあたしに余計ストレスを与えたわけだけどその辺どう落

とし前つけるよ?」

「はいっ!? 落とし前ッ!?」

「そう落とし前」

光景的には脅迫現場だろう。そしてあながち間違いではない。

「ストレス発散させてくれるよねさせてくれないのねえさせてよ」

桜の顔が真っ青に染まった。

*

この学園都市では、超能力開発なんていうイカれたカリキュラムが存在する。

230万人の学生がそのカリキュラムを受けていて、当然あたしも受けたわけだが、その結果得られた能力は実に使い勝手が悪いものだった。

ダメージカウンター
衝撃貯蓄のレベル1。

レベル0 無能力者の一個上、である。

まあレベルに関しては文句は無い。カリキュラムを受けた約6割があたしみたいなレベル1やレベル0に分類されるのだから、納得できる。逆に一番上のレベル5は230万分の7しか居ないらしいから、何もそんな寂しいランクに入りたくもない。

だが、宿った能力があたしはあまり好きじゃない。

あたしの能力は 受けたダメージをそっくりそのまま好きなときに放出できる、というものであった。

つまり、一度痛い思いをしないと、満足に能力を行使できないのだ。

お陰であたしの身体には、傷が耐えない。

*

一目散に逃げ出した桜を、あたしは追っていた。

人から見たらその姿はさしずめ、脱兎とチーターだろう。脚力だけは自信がある。どんどん差を詰めて、思いっきり奴の襟を引っ掴んだ。

「ぐ、えッ!!」

「何で逃げんの」

理由はぶっちゃけわかってるが、それでもなお聞いた。聞いてやらないと可哀想かな、なんて思った。ああでもこういうのって人から嫌われるんだろうな。

「ごめんなさい!!猫娘呼ばわりしてすみませんでした!!だから離してくださいお願いします!!」

「そんなの聞いてない」

逃げ出さないようにがっちりと襟を掴んでやる。桜はじたばたと

暴れるが、襟を掴まれては力づくで抜け出すのは困難だ。さもなくば首が締め付けられる。

「さて」

ストレスの捌け口に向けて、あたしは暇な片手を振り上げた。

「…ッ!」

視界の隅でそれを捉えていた桜の手が何かを握っていた。何だ、それは。どこから出したのか、そんなことを考える暇も無く、それはあたしの腹に勢いをつけて食い込み

「がつ!」

激痛。思わず桜の襟を掴んでいた手を離してしまう。桜はその隙をついて、あたしから距離をとった。ぐらりと揺らいだ上半身を支えるため、あたしは地面に触れる両足に力を入れる。

何だ、何が起きた。

痛む腹を押さえながら、殴ったのであろう桜を睨んだ。

彼の手に握られていたのは、小ぶりなハンマーだった。

「な…」

「…はっ!？あ、え、あの、これは」

荒く呼吸をしていた桜が、我に返って慌しく言葉を探す。生命の危機に瀕して、咄嗟に取り出したハンマーがあたしの腹を殴った

ということでもいいのだろうか。彼の慌て方を見る限り、故意では無さそうだ。演技だというなら話は別だが、桜の究極と言ってい

いびりりが火事場の馬鹿力を引き出したと考えれば辻褃は合う。

まあいい。これで彼に『ハンマーで殴られる痛み』を与えることが出来る。

武器を持たないあたしにとって、この痛みはありがたいものだった。

だんだんと痛みがひいてきた。痣にはなっているだろうが、切り傷よりはマシだ。切り傷はそれこそ大ダメージを与えるチャンスが増えるけれども、その分体力が削られるから。

「…ひやは、ひやはははははは」

「え、あの、猫娘（仮）さん…？」

「細波六月」
なみなみむつき

「さざなみ…さん？」

「よつくもやってくれたなあこのチェリーブロッサムめええええええ！…！」

彼は自業自得という言葉を知っているのだろうか。目には目を、歯には歯を、でも可。

右の利き足で強く地面を蹴る。あたしの脚力では桜とあたしの間は半歩ほどで縮まった。一瞬で目前に迫ったあたしに、彼は目を見開いた。その瞳は驚愕と恐怖が混じったような色で濡れている。

拳は必要ない。触れるだけで能力を行使することが可能なあたしは、右手を彼の腕へ向かわせた。怯んだ桜には叫ぶ暇も無ければ、逃げる暇も無い。はずだった。

ドスッ、と痛々しい音がして、やはりあたしの痛覚が泣き叫んだ。

桜の肩へ伸びた右手は、彼に触れる前に一瞬停止した。その隙を利用し、また桜に距離を取られる。

さっきのは、見えていた。

恐ろしい反射神経だ、と感嘆しよう。 桜は、ハンマーをあ
たしの肩に振り下ろしたのだった。

「…うあ、ああ」

またやってしまった、と言いたげな呻き声が桜から漏れる。呻きたいのはこっちだ。二発目だからと言って、ハンマーに殴られる痛み慣れるわけでもない。むしろ倍増したかのように錯覚さえする。

「このッ…！」

ハンマー二発分のダメージを受けたあたしの身体には今、ハンマー二発分のダメージを与えるだけのエネルギーが貯蓄されている。一気に放出させることが出来れば、当たり前所にもよるが桜のような小柄な人間は気絶させることが可能になった。

だが、それが果たして出来るか。二回目の火事場の馬鹿力が、偶然にしては出来すぎている。

彼がそういう人間なのかはわからないが、無鉄砲に突っ込んでもまたハンマーで殴られるのがオチだろう。

あたしは苦虫を思いつきり噛み潰して、飲み込んでやった。エネルギーと一緒に、ストレスも溜め込んだあたしの身体に、ぐちゃぐちゃの苦虫は大分効いた。

火事場の馬鹿力は、窮地に立たされたときに出るものだと言っている。

なら、その窮地を崩してやろうじゃないか。

「うぐ…っ、こっ、来ないでください!!」

ハンマーをあたしに見せつけるようにして桜は言うが、気にせずあたしは無表情でじりじりと詰め寄った。二回もハンマーで殴っているのだから脅しにくらいなるだろうと思ったのだろうが、あたし相手になるわけない。あたしが怖いのはストレス、それだけだ。

……まあ、嘘だけだ。

さっきまでとは違う、焦らすように近づくあたしに、桜の火事場の馬鹿力は完全に出るタイミングを見失ったらしい。飛びかかって来ないしハンマーを振り回したりもしない。それでもあたしは油断はせずに、ゆっくりと確実に距離を詰める。直線距離にして大体5メートル。

桜は舐るような不穏な圧力に、元々引きつっていた顔をさらに引きつらせた。ここからでも握ったハンマーに力が入っているのがわかる。

そろそろか、とあたしが思った、その瞬間だった。

「わああああああッ!!!!」

桜の悲鳴と、あたしと桜の間にレンガの壁がそり立ったのはほぼ同時だった。

「なっ!？」

あたしの行く手を阻むその壁は、それこそ幅は広くない。だが、あたしの思考を中断させるのには十分すぎた。なお続く桜の絶叫が

徐々に遠くなっていくのに気づいて、慌てて壁を潜り抜けて彼を追う。

「わあああああああああ、あッ！！？」

「誰が逃がすか！」

やはりすぐ追いつけたあたしは、今度はかの壁のごとく桜の前に立ちふさがってやった。彼は怯えた表情をしていたが、手に持ったそれは凶器ではない。しかも桜は立ち止まらず、半ば発狂したように絶叫してハンマーを振りかぶってきた。

「あああああああああ！！！」

「っ！」

横殴りに迫ってきたそれは、どう避けるか考えることすらさせてくれないくらい、豪速だった。さっきの壁といい何といい、何なんだこいつは。

避けきれないと悟ったあたしは、作戦を変更して手の平でそれを受け止めることにした。もちろんそれだけでは手の骨が砕けて終わるだろうが、あたしの能力で相殺すれば受け止められるはずだ。

ぱんっ、と乾いた音がして、あたしは右手から伝わる鉄の冷たい感触を噛み締める。上手くいったみたいだ。桜がぼかんと呆気にとられている。あたしはもう一発分残ったエネルギーを叩き込もうと、ハンマーを押さえたまま桜の腹に左手を押し付けた。

思いのほか強くその手は彼の腹にめり込んだ。そしてそのまま、

「うぐっ！！！」

放出してやる。

小柄な桜の身体はいとも簡単に吹き飛ばされ、彼は公園の土の上に叩きつけられる。コンクリートよりは受ける衝撃は小さいはずだが、それでも桜は痛々しく呻いた。

「さて」

あたしはそう小さく言って、倒れる彼に歩み寄った。

*

「こんにちは。細波六月さん、だよな？」

長身の美青年と、あたしは対峙していた。場所はいつもの大公園。黒髪の上のシルバーのヘアピンが日光を反射して、あたしの目を眩ませにかかる。

「…何の用」

「いや、この間光谷桜っていうレベル2の能力者がここで暴行にあつたって聞いて。その犯人が君だって聞いて、さ」

何だあいつ、レベル2だったのか。結局桜の能力が何だったのかはわからないままになっていた。まあ今となっては聞いてもどうにもならないし、あたしは心底どうでもいい。

「あんたは風紀委員か何か？」
ジャッジメント

「いいや」

黒髪は即答した。あたしは目を細める。

「…じゃあ何」

「ええ？俺が君に会いたかった理由なんて聞くほどのことじゃないよ。…ただ、ダメージカウンター衝撃貯蓄をボッコボコにしてみたくてさ」

桜といい、こいつといい、あたしといい。

この街はイカれてしまっている。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜（後書き）

（そんな街で、これからどんなことが起こるのだろうか？）

ボッコボコ宣言の彼と細波さんの話は書きません。多分。

【サンプル】とある小路の犬気支配（前書き）

オウニンポヤ様より、サンプル小説となります。

「サンプル」とある小路の大気支配

動脈より枝分かれした毛細血管によって人体の隅々まで血液が運ばれるのに似て、大通りより無数に別れた小路を通り生徒たちはここ、学園都市の各地へとその身を運んでゆく。

これはとある小路で起きたこと。

とある小路の大気支配エアリアル

> i 3 3 4 9 3 — 2 1 6 1 <

夜、人通りが絶えた裏通り。月の光は聳え立つビルに遮られ、それに代わる街灯は疎らにあるのみ。影の黒さは幾重にも重ねられた罪の数。そこは正しく悪意が支配する空間である。

寮への近道なのであろうか、地へ届かんばかりに長い鮮やかな茶色い髪を揺らし、その少女は暗い小路を歩んでいた。常盤台中学の制服を纏ったその少女は盲いているのか、神と同じ色をした瞳に光はなく、左手に握られた白杖を振り行く手を探っている。

少女の前方に足音、三人分のそれが小路に響く。立ち止まった少女の行く手を塞ぐように足音は動き、そして指呼の距離で停止した。

足音の持ち主は、その顔を獲物を見つけ出した肉食獣のような笑みで歪めていた。彼らはこの小路を本拠として様々な悪事を為す不良少年の集団、いわゆる武装無能力者集団である。スキルアウト

「おいおい姉ちゃん、こんな夜道の一人歩きはあぶねえぜ。それとも誘ってんのかあ。」

彼女の正面、リーダー格であろうか、三人の中央に位置する金髪の男が下卑た笑いと共に少女へと口を開く。

続けて金髪の右手側より、左耳にピアスをつけた男がニヤニヤと笑みを浮かべながら声を放つ。

「慌てて帰るにやまだ早えよ。寄り道ぐれえいいだろお。」

少女は男たちが漂わせている危険な雰囲気には怯えているのか、その場より動かないでいる。

「楽しいトコ知ってんだよ。遊びに行こうぜえ。」

黙り込んだ少女の姿は嗜虐心をそそるものであったのか、残る一人である丸顔の男は楽しげな顔でそう話しかけた。

少女が動きを見せたのはその時であった。軽い溜息と共に肩をすくませ、そして左手の白杖を地面に線を引くように軽く振る。

刹那、三人は何か足元を打ち払われ、その身を前方へと半回転させて倒れこむ。慌てて立ち上がろうとするが、彼らにできたことは驚愕の声を上げることぐらいであった。動かせるのは僅かに首のみ、彼らの腕が、足が、胴が、何かにより地面へと押さえつけられ微動だに出来ない。

「てめえ、何しやがッ!？」

得体の知れぬ戒めより逃れようと身を震わせつつ少女へと放たれ

た金髪の罵声は、延髄に何らかの衝撃を受けたのか、頭部を跳ね上げさせられたことで途切れ、そこから続くことはなかった。両側の二人も失神した金髪と同じように一瞬、頭をもたげたかと思うと意識を刈り取られた。

眼前の男たちが突如這いつくばり気を失う、という異常な事態が起こったというのに、少女が驚いた様子はない。それどころか、何の関心も持たぬかのように、この場を立ち去ろうと再び歩み始めた。

三人の横を抜けて進み続ける少女の後方より、軽い、踏み台より跳び下り着地したような足音が小路に木霊した。その音を聞き取った少女が振り返ると、路面に伸びた男たちの向こう側、そこに少女と同じく常盤台中学の制服に身を包み、黒髪をツインテールに纏めた女の子がいた。

「ジャッジメント風紀委員ですの！暴行の容疑で・・・と・・・これは・・・。」

背筋を伸ばし、袖に留めた腕章を示しつつ凜とした声で放たれた女の子の言葉は、次第に尻すばみになってゆき、全てが発せられることはなかった。

さもあるう。三人連れのアンチスキルが少女へと絡んでいる場面を監視モニターで確認し、現場の裏路地へと駆けつけてみれば、当の男たちは吐き捨てられたガムのように路面にへばり付いていたのだから。その無様な姿を目にすれば張った気も抜けよう、というものだ。

思わず脱力してしまったとは言え、その女の子もジャッジメント風紀委員として多くの経験を積んだ者、すぐに立ち直ると手際よく倒れている男たちに手錠を掛け拘束していく。

「あらー？そこにいるのは黒にゃんかしらー？」

少女が女の子へと話しかける。この二人は面識が有るようだった。

「風祭先輩！？・・・犬猫ではありませんのでその呼び方は止めていただけませんか？」

風紀委員の女の子、白井黒子は不良男子に絡まれていた少女が知人であったことに驚いた様子を見せた。ついで白井は軽く眉をよせて話し掛けてきた少女、風祭涼が使う呼び名が気に入らないらしく、使わないよう求める。

そしてはぐらかされる。

「えー？黒にゃんは黒にゃんでしょー？」

そのような風祭の反応に慣れているのか、白井は本題へと話を進めてゆく。

「それで、これはどういう状況ですか？」

「何にもやってないよー？この人たちが勝手に転んで気を失っただけだよー？」

「ウソですわね。」

風祭の返答を白井は一刀両断に切り捨てる。「状況」を問うているのに「何もやっていない」と答える時点で、「私は何かをやりました」と言っているようなものだ。

そして、風祭にはその「何か」を可能にするだけの能力を持っていた。

「なっ！？もしかして聞く耳なしー？」

「そう言う風祭を見る白井の目は、」好き勝手能力を使わずに風紀
委員長を待て、ジメント「いつも言っているじゃないですか！」と、雄弁に語
っていた。

「<大気支配>たる先輩の能力なら不良の二人や三人、エアリアル スキルアウト気絶させる
ことぐらい簡単ですの。」

「<大気支配>、それは学園都市最強の能力者たち（LEVEL5）
の一人、空力操作系能力者の頂点に立つ者へと授けられた尊称であ
る。この少女、風祭涼は大気の王者として君臨する者であった。」

「あはは・・・、じゃさよならー？」

これから先に予想される面倒を回避するべく逃げる宣言をする風
祭。それを止めようと白井は空間移動レポートの演算を開始するが、一歩遅
かった。

風祭の姿が一瞬、歪んだかと思うと溶けるように消失していった。

「じゃあねー？バイバーイー？」

虚空から姿なき風祭の声が小路に響く。残された白井の顔には、
「次はお説教だけでは済ましませんの！」という内心のセリフがあ
りありと刻まれていた。

【サンプル】とある小路の犬気支配（後書き）

オウニンボヤ様、ありがとうございました。

感想など、お待ちしております。

【サンプル】とある月夜の超進化論（前書き）

ユーシン様より、サンプル小説です。

「サンプル」とある月夜の超進化論

学園都市の十八学区にはトップクラスの教育機関意外にも様々な施設がある。例えば植物園。といってもその施設自体が大学の持ち物なのだが。

明星大学付属植物遺伝機能研究所、という書類上の堅苦しい名前ではお客がこないのに、園長の独断で勝手な看板が取り付けられている。もちろん研究施設といっても、観光を主軸になるよう設計されているので外装も内装も見栄えの点では問題ない。

ガラスのドームから見える生い茂った草木を見ればここが何をする所かはある程度推測できる。

こういった管理が難しい場所には専門のスタッフや業者を必要とするが、ここは違う。

すべてが学生達にまかされているのだ。それは園長でも例外ではない。茨野アゲハ^{いはの}という少女は十八歳にしてここの管理を任されている園長だ。

彼女は学生でありながら授業を受けることもなく一日ほとんどの時間を徘徊に使っていた。

入り口から入ってすぐにあるカフェから眺めることのできる花畑には様々な色の花が咲き誇り、彼女はちょうど今そこで水やりをしている。

木の幹のような髪色をした茨野の顔立ちは綺麗に整っているが、そこに血の気のない肌の色や生気の無い目つきが加わって、周囲には服屋に並ぶマネキンのような無機質で冷たい印象を与えており、身に着けている真っ黒なワンピースはもはや着せられているように見えてしまうほどだ。酷くいえば、ガラス越しのシヨールームでじっ

としても誰も気に留めないかもしれない。

生命力が溢れでるこの空間と対称的な茨野に、初めて来た人間は不気味さを感じ、そこに近寄ろうとしない。

だが、慣れればそんなこともないと言わんばかりに一人の少年が、彼女の背中に声をかけた。

「植物園の年間フリーパスって売れるんですか？」

赤黒いロツプイヤーのような髪で、白いカッターに黒いズボンの無個性な制服を着た少年は、草花を見に着たとは思えない、それでいてデリカシーのない台詞を平然と口に出しつつ問題のカードに目をやっている。

「あそこのカフェが見えるだろう？　昼食や放課後にここで時間をつぶしにくる学生用だ」

ゆっくりと振り返り、茨野が真っ白な指を向けた先にはたくさんのパラソルと椅子が並べられている。賑やかというほどではないがそれなりに席は埋まっているようだ。

「最近顔見てなかったんで、ちょっと心配だったんですけど」

「わざわざ訪ねてくれたのか？　心配も何も毎日同じことの繰り返しだ。巡回、食事、睡眠、それだけだ」

「あんまり充実して聞こえないんでやっぱり心配です。それで楽しいですか先輩は？」

「結論から言えば、割とな。お前が来てくれるだけで今日は十分

充実しているよ」

薄く笑みを浮かべる少女の言葉に、表情のなかった顔を少し赤くした少年は気恥ずかしさを誤魔化すように話題を変える。

「そういえば、オレが来たときはいつつもここにいるような気がするんですけど」

「この花には色々と思い入れがあるんだよ。　そうだなあ、お前はパンジーの花言葉を知っているか？」

「さあ？　そーゆータイプの豆知識には全然興味ないんで」

「心の平和、だそうだ」

茨野の目線は少年の方でなく、ネックレスのように首に下げている植物のデザインをあしらった銀の鍵の方だった。

その鍵をみつめる彼女は、どこか笑っているようにも悲しんでいるようにも見える。

「どっかで聞いたような気がするような、しないような」

「私の親友が好きだった言葉だ。　お前の方がよく聞いてそうだが」

「あんまり昔を振り返るのは好きじゃないんですよね」

少年は嫌そうな顔をしつつも彼女の言う親友と同じくであろう人物を思い浮かべてしまう。

会話が途切れたのが気まずいのか、「まあ、元気ならいいんです。

「じゃあ仕事があるんで行きますね」と、少年はそそくさ出口を目指して歩く。

とても短い会話だが、彼も彼女も特に不服そうな表情はない。少年はいつもせわしなく動き回っているし、少女にはいつでも時間がある。

簡単な見送りを終えた茨野は来た道をゆっくりと戻り、一番奥の自室を目指し歩を進め始めた。

茨野の自室は観覧できる区画と変わらない広さを誇る。外壁には大量のツタが張り付いて、そのいくつかは秋でもないのに紅葉しているのだが、それは試験的に造り出した植物を混ぜて観察するためだ。部屋の中央にある玉座に似せた岩のようなものと、そこに座らされたマネキンのように、じっと動かない少女は、屋根のガラス越しに差し込む薄い月明かりに照らされている。

「久しぶりの客人だな」

貯水用に外壁の真下に設置された細い円の水路が揺れを感知し進入者の存在を茨野に知らせる。

そしてすぐにボンツという音とともに、防火扉のような分厚い入り口が焼き切られて内に倒れた。

その奥から十人程度の物騒なモノを装備した覆面達が一斉に茨野を取り囲む。部屋の向こうからはキーンという耳障りなかん高い音が

響いてくる。

「茨野アゲハ。抵抗せずに後ろの扉を開け」

リーダーらしき男が指をさす先には植物園という光景からはどこか浮いている鉄の扉がある。

「対能力者用のジャミングか。用意がいいな。どこの部隊だ？」

「その状態ではろくに動けないだろう。お前はおとなしく開錠の方法を提示するだけでいい」

「その後で殺す、か……なかなか無慈悲な連中だ。そうやって何人殺してきたんだろうな」

溜息を吐きながらくだらなさそうにしている茨野の顔からは恐怖を感じ取れない。

「そうか、こちら側の危機感が伝わっていないらしいな。……三秒以内に答えろ」

男は不格好な機関銃の先を茨野に向ける。

「……三！ 二！ いっ！ ……ちい？」

男の叫びはそこで途絶えた。なぜなら、彼は足下から生えた槍のような大木の根に腹部を貫かれたからだ。

男の頭は垂れ下がり、槍のようなものには赤黒い液体が流れている。

「結論から言えば、必要ない。それと、書類も見ずに能力者とい

うだけで判断したのは迂闊すぎるな」

一瞬状況を遅れて認識した他の覆面達は合図もなく一斉に銃の引き金を引く。

ダンッダンッという大量の発泡音が部屋中に響き渡る。

結果、一つも弾も彼女には届かない。阻んだのは先ほど男を貫いた槍のようなもので茨野が創り出した特別な植物だ。

茨野は背中に植えつけられた接続装置にある九つのうち二つのスロットをその植物に使用している。

一つは地面に潜らせ、もう一つは一度地面まで下がってから根のよ

うに別れ、槍のスカートがUの字状に彼女の全身を覆っている。

「ややこしい過程を省くと、私は創る能力者だ。つまり振るうすべては私が体を動かすことと大差ない」

そこで言葉を切る。そして強く、静かにこう言った。

「お前達の相手をしているのは特殊な武器を持った子供ではない。真正正銘の化け物だ」

それが合図だったのか、一斉に地中から槍が飛び出し、反応が遅れた者は先ほどと同じ結果を招いた。

何人かが転がるように回避して発泡を続けても茨野アゲハは座ったまま動かない。

編みこんだようになってい

る太い根の隙間を狙うには距離があり過ぎるし、この状況で足を止めることは自殺行為だ。

とつさに、部隊の一人が腰に着けていた缶ジュースぐらいの手榴弾からピンを引き抜き、彼女目掛けて投げつけた。

たとえ彼女自身にダメージが入らなくても植物は焼け、間接的に戦闘手段を失うだろうと判断したからだ。

小型といえ、それは人一人をバラバラにするには十分な威力である。爆発はドガンツという炸裂音とともに周囲を焼き、彼女のいる玉座を挟り飛ばし、周囲に大量の土煙を巻き上げた。

二人の男が彼女の死を確認するため近づくとか何か細い蛇のようなものが動くのが見えたが、その正体が分かった時には男の一人の体中に鞭のようなものが撒き付いていた。

バキバキッと肋骨が折られた音と共にゆっくりと立ち上がった茨野は頑丈な装甲さえ失ったものの体には傷一つない。

ぐらつと揺らめく彼女が袖を振るうと、中から飛び出す触手がもう一人の男の銃を握り潰す。

男は唐突な反撃に硬直してしまった。そして次の行動をとるよりも速く彼女の周囲に針山が築かれた。

残る三人のうち足を止めていた二人もすでに串刺しになっている。

「あと一人か」

その一人は茨野の視界には入っていないが、彼女は別の方法で索敵を開始する。

地中に潜った根には貫く意外にもう一つ役目がある。それは振動を感知することだ。

一本一本が彼女の意味で動かせるので、彼女からすれば簡単な作業だ。

「うおおおおおッ！！」

彼女は根で感知するよりも先に背後から絞り上げた絶叫を耳にした。

弾切れしたのか、迫る男は刺殺用と分かる異様なナイフを握っている。

それでも茨野は振り返らず、そこに立ち尽くす。

そして男は見た。彼女のばつくり開いて露出している背中部分、正確には中心の接続装置から急速に柿色の蕾が生まれた光景を。

今までの根や蔓と違い、具体的な使用方法のわからない武器に、男は思わず足を止めてしまう。

そして男の次の判断よりも先に蕾の茎が急激な細胞分裂を行い、花は男の目の前で開花した。

普通の花なら何の意味も持たないだろう。だがその花は違う。大きさは茨野の全身よりも二回り大きいなら全く違う意味になる。

男はその光景を見て、花が開くというよりもっと的確な表現があると素直に思った。

竜の頭が大きく口を開けている。実際には見たことなど無いがおそらくこんなものなのだろうと。

花卉一枚はまるで爬虫類の鱗のようで、内側には大きな刃が三重にびっしりと備わっている。

ガチンツと竜の口が閉じられたのを最後に辺りは静寂な夜に戻った。

砕かれて機材がむき出しになった玉座に腰掛ける茨野は首だけになった竜を眺めている。

あれこそが自身の能力名でもある『テンペスト』だ。破壊力は凄まじいものの、キャパシティーは馬鹿にならない。

百のエネルギーがあるなら、発生だけで五十、十分間の起動で十程度だろうか。あまり割に合わない。

この玉座のようなものは植物園全体とのパイプラインであり繋がったままなら百以上も余裕だがそれでは他がもたないので結局すぐに使い捨てる。

（まあ、キャパの高さが急速な枯化を生み出すから問題はないが、金属は溶かせないからな）

もうすでに水分を失い変色し始めている『テンペスト』は辺りの死体を丸飲みにし、内容物を溶かし栄養にしたものの、後ですぐ土にかえっていくだろう。

（いつからだろうか。何人殺したかも憶えていない）

静まりかえった中で、一人彼女は先ほど男を侮辱した言葉を思い出す。

人を殺すことは食物連鎖と変わらないと認識している、というよりそう考えることにした。勿論、いつしか自分の番が来ることも承知している。

彼女は親友と約束したのだ。ここの扉を守ってくれと頼まれ、自分はこの植物園という居場所をもらった。

だが彼女はその中身を知らないし、扉を開けたことも無い。そして今日もまた繰り返された殺戮も当初からはあまりにも想定外の事だった。

それでもいい、たとえ親友がいなくなろうと役目を降りる気はない。

ピオラという花はパンジーと誤解されるらしく、正確には別種で花の大きさが違うらしい。

それを誤解した親友はその花言葉の一つをパンジーとともに彼女に送ったのだ。

『信頼』。

（お前は私に、生きる理由をくれた。たとえこの奥にあるのがどんなにくだらないモノでも、お前との約束は私のすべてだ）

過去に円盤を埋め込んだ時から続いた悲惨な実験の毎日から、救い上げてくれた彼の手のぬくもりと、暖かい言葉の一つ一つを思い返しながら、彼女は瞳を閉じた。

【サンプル】とある月夜の超進化論（後書き）

ユーシン様、ありがとうございました。
感想お待ちしております。

とある暗闘の犬気支配

1・Side

Mikoto Misaka (前書)

オウニンボヤ様より。

序章ということ、よろしくおねがいます。

地に在る限り昼より夜へと時が進む。この不変の法則は全てを支配するもの。必ず訪れる夜は闇を含み、それは光を塗り潰し、一色へと染めてゆく。

ここ、学園都市もその例外とはならない。漆黒に沈む街を科学の光でどれほど明るく照らそうとも、全ての闇を破り捨てることなど出来はしない。

そう、このビルの屋上のように、かしこの建物の地下のように、闇は確かに存在する。

> i 3 4 5 5 0 — 2 1 6 1 <

1・Side

Mikoto Misaka

とある街角、そこに在るのは白という差し障りのない色を纏い、およそ特徴の無い形を取る、「無個性」の一言で表現可能な建築物。それが面する通りはもう深夜といってよいこの時間帯、人が通る気配などはない。白い建物と道を挟んだ対面のビル、その脇に設けられた街灯が、通る者が絶えた道をビルの下半分と共に明るく、しかし虚しく照らすのみ。

視点を移し、ビルの上方より下方を望む。黒々とした中空を四角に切り取るその空間の境界線、屋上の縁に足を置き佇む少女がいた。短めの茶髪を後ろで括り、黒いＴシャツとクリーム色のショートパンツという活動的な装いの少女。自らが立つビルの道向かい、白い建物を見据える少女の名は、御坂美琴という。

御坂は酷く疲れていた。さもあるう。昼夜問わず、休息も、食事
も碌に摂ることなく動き続けていたのだから。普段の健康的で活発
なイメージとは対照的に、今、ここにいる御坂は疲れ淀んだ雰囲気
を纏っていた。

しかし、御坂の瞳は力強い光を放っている。それは内に秘めた固
い意志であろうか、それとも強い怒りであろうか。

「あと二ヶ所。」

ポツリ、と御坂が呟く。それはとある計画に関与し、かつ未だ御
坂の襲撃を免れている施設の数。そのうちのひとつが御坂の視線の
先に在る建物、名をSプロセッサ社病理解析研究所という。

つい、と黒いキャップを握った手をかざし、御坂はそれを目深に
被る。その顴の下、影に覆われたその表情は先程よりも厳しさを増
している。

自らに言い聞かせるように再び呟く。

「今夜中にすべてを終わらせる。」

意を決したのか、御坂は虚空へと足を踏み出す。眼下の標的を破
壊するべく。
けんきゅうじょ

それは『絶対能力進化』計画を止める為に、我が身の分身達を救
う為に。
イカレた
シスターズ

とある外道の断頭奔流（前書き）

asuta様よりお預かりしました。アポリオン様のキャラクターとのコラボになります。

とある外道の断頭奔流

「ぜえ．．．はあ．．．」

少女と男は逃げていた。

少女は、学園都市の暗部と呼ばれる組織に所属していた高位の能力者である。

男の方も、統括理事長直属部隊『獵犬部隊』に所属する元『警備員』である。

そんな二人は出会い、恋に落ちた。愛し合っているが故にお互いの死が怖かった。結ばれたいと、一緒にいたいと思っていたとしても、学園都市に、統括理事長アレクスター・クロウリーによって自分達は使い捨てられるのみである。そんな自分達の運命から逃れるために、二人は学園都市を捨てる覚悟をした。愛の逃避行。二人の前には希望しかなかった。なのに．．．．．

「何なんだよ！？アレは！？」

男は、少女の手を引き逃げながら叫ぶ。意味が分からなかった。何であんなモノがよりにもよって追いかけてくる？

男の口元だけが見える般若の面で覆い、ビジネススーツに身を包んだ、真つ黒い長髪を靡かせた死神のような男。それが、西洋刀を引き吊りながら追いかけてくるのだ。一目で分かる。アレは確実に危険だ。剣なんて持っているのだから、危険というのも当たり前かもしれない。だが、それ以上に纏っている雰囲気が危険過ぎた。暗部に所属する人間なら誰でも分かる、人を簡単に、躊躇いもなく殺せる人間の、独特な殺意。追いかけてくる死神のような男はそれを持っているのだ。

あれに追いつかれてはいけない。それだけを考えながら、男は少女の手を引いて逃げる。だが、運命とは無情かな。路地裏に逃げた二人は、死神のような男にあえなく追い詰められた。死神は、迫る。命を刈り取る武器を、カタカタという音を立てながら引きづって、

ゆらりゆらりと、陽炎のように。

男は少女を自分の後ろに隠しつつも、

「く、くるなあ――！」

恐怖のあまり銃を構える。『スターマイン星火花』と呼ばれる学園都市製のハンドガン。まだ暗部でしか出回っていない、未だ実験段階の、詳しい原理が男には全く理解不能な発明品。分かることは只一つ。これは、人を一発で血と肉の飛沫に変えられるということだ。

「ちよつとでも動いてみる――！こ、こ、こいつをおまえにぶち込むぞ――」

男は銃を構えて、目の前の死神に脅しをかける。だが、止まらない。死神は、一心不乱に、ただただ自分たちに迫ってくる。

「ひい！？」

男は、自分の想い人の前だということ等すっかり忘れ、情けない悲鳴を上げながら引き金を引いた。

バンッ――！という乾いた音が鳴り響く。銃弾は、真っ直ぐに死神のような男へと向かう。銃弾は死神の命を摘み取りにいく。しかし、
「フン――！」

死神は、それを蚊でもはたき落とすかのように、軽く叩き斬った。まるで鈍器を叩きつけるかのようなその動きは、決して剣術などと言ったスマートなものではなかった。言うならばそれは暴行。それは人殺し。乱暴で粗暴な、狂った殺人者の挙動であった。そんなことを考える間もなく、

「イライラさせるなあ――！」

男に刃が叩き付けられた。一閃する白刃は、男の右腕を斬り落とす。
「ギアアアア――！」

男は痛みあまりにうずくまり、絶叫した。男は思った。このままでは確実に殺されると。その予想通り、死神は男にとどめを刺さんとして西洋刀を振り上げた。だが、その瞬間

「お前、何のつもりだ？」

死神は不意に動きを止め、尋ねた。今まで男の後ろに隠れていただ

けだった少女が両手を広げ立ちはだった。

「モヨコー!」

男は少女の名前を叫んだ。モヨコと呼ばれた少女は男の方を振り返って、

「平気だよ、しげる。アナタにだけは手出しさせないから」

と言って微笑んだ。

「手出しさせないって．．．やめろよ．．．お前、戦闘系の能力者じゃないだろ．．．」

男、四季崎樹は、少女、倉科モヨコの死という未来がはつきり見えてしまい弱弱しく呟く。倉科モヨコの能力はレベル4記憶探求^{メモリートラベル}。相手の体の一部に触れ、記憶を選択して擬似体験する能力である。希少性が高い能力ながらも、戦闘能力は全くない。暗部組織に居た頃も、回される任務の殆どが諜報の類であった。それに相對するビジネススーツの男。何かの能力を使っていたのか、元々の身体能力かは不明だが、少なくとも銃弾よりは素早く動いていた。刀なんて持つてることからも分かる通り、明らかに戦闘系である。勝負は初めから明白であった。だが、

「大丈夫。絶対大丈夫だから」

少女はそれでも決して逃げようとはしない。恐怖に震えながらも、大切な人の為に。

「さっさとどいてくれないか？俺は可愛い女の子の顔面を破壊したくないんだ」

西洋刀を、モヨコののど元に突きつけながら男は吐き捨てた。だが、「やってもいい。けど、しげるには指一本触れさせない。死んだって、アナタを呪い殺してでも止めるから」

モヨコはそう言って死神の男を、凍てつくような眼光で睨む。その瞳には恐怖が映りながらも、それでいて力強かった。本気で呪い殺す気さえ伺えた。それを悟ると死神は逆上、

「アああははははは!」

．．．するどころか笑い出した。その光景に少女は呆然とし、男は

痛みさえ忘れそうなほど驚いた。

「ハア．．．面倒な」

打って変わり、死神は億劫そうに首をコキコキと鳴らした。いよいよもってモヨコは思考がつかなくなっていかなかった。地面に蹲る樹も同じだ。

「男はともかくお前はいいや。助けてやろう」

死神は面を食らっているモヨコにそう言った。

「私だけって．．．しげるはどうするの!？」

モヨコの言葉に、

「知らんな。どのみち俺が殺さなくても別の誰かが殺るだろうよ」
素っ気なく死神は返す。

「蚊がいるとイライラして殺したくなる。つまりはそういうことだ」
非人道的な、それすらも超えて化物じみた考えだった。そう語った死神は、

「．．．．．行つてよし」

と言ってモヨコと樹に対して西洋刀を上段で構える。その行動は、
「三度は言わん。行つてよし」

と、自分に伝えているのだとモヨコは思った。だが、それを分かっているながら少女は、

「私はここを絶対に退かない」

と力強くそう言った。大切な人を見捨てるという選択肢なんて、考えられるワケがなかった。死神はモヨコの決意を受け取ると、はあ．．．と溜め息を吐き、剣を振り下ろそうとした。その時、

「ま．．．待て．．．．．」

地面に崩れ落ちていた樹が、斬られた腕を押さえながら、立ち上がった。その様子に、死神は動きを止め、少女は目を見開き驚愕する。
「なんだ？」

死神は尋ねた。すると樹は、

「お前．．．．．モヨコがもしここで逃げれば．．．．．絶対手出ししないんだな？」

と問うた。

「見ていてイライラするバカカップルならともかく、流石に殺せんわ」
死神はあっさりと答えた。

「それに、さつきも言ったが、可愛い子は斬りたくない」

と、付け足す。死神の口調は飄々としていたが、嘘は無さそうだった。樹はそれを聞くと、

「そうか．．．．．良かった．．．．．」

そう言っただけで安堵の表情を浮かべた。

「何．．．．．言ってるの？」

モヨコはその表情を見るなり、樹にそう尋ねていた。

「まさか、私だけ助けて自分は死ぬとか、そんなこと言わないよね？」

嘘だと、そんなことはないと言っただけでよかった。しかし、少女の思いは簡単に打ち砕かれる。

「そうだ」

樹はたった一言そう言った。何で？どうして？そんなモヨコの気持ちを察し、

「俺はモヨコに生きていて欲しい。そういう選択をして欲しい」

と自分の思いを伝えた。好意という気持ちから発生する、自己犠牲に過ぎないその気持ちを。

「もし俺と一緒に死ぬなんて言うなら、俺はモヨコ、君を嫌いになる」

その思いはあまりにも強く、少女にとって残酷な一言に結びついた。モヨコは絶望した。樹の嫌いになるという一言はポーズではなかった。本気で、死ぬその瞬間に自分との愛を忘れると、冷た過ぎる表情は伝えていた。死神から逃げきって二人とも生きるなんて選択肢は最初から消え失せている。つまり選択肢は二人とも死ぬか、自分だけ生きるか。樹と心中を考えれば、樹は自分を嫌いなまま死んでしまう。かと言って、樹を見捨て逃げる選択なんて出来ない。少女は、死神がしびれを切らしかけたその時、選択した。

「グアアアアア!!」

後方から響く樹の断末魔を振り払いながら、モヨコは必死に走った。少女は、死神から逃げるという選択肢を取った。樹の気持ちに答えたかったのかもしれない。自分を好きなまま、樹に死んでもらいたかったのかもしれない。ただ単に、最後の最後で死神が怖くなったのかもしれない。兎に角少女は、自分だけが生きる道を選んだ。少女は走って、走って、走って……そうして幻想を殺す少年の物語が始まった鉄橋で、恋という名の物語が終わってしまった少女は全てを消失して立ち尽くした。

「……なんで私には力が無いんだ」

少女は自分の無力を呪った。能力者の街学園都市。様々な能力が0〜5までのレベルに分けられている。そんな街の中にいて、何故自分は戦闘系の能力者でないのか？大気の支配者と呼ばれる盲目の少女のように、引力を統べる争い嫌いの少女のように、感情の無い完全な空間移動能力者のように、最低最悪最強と呼ばれるスキルアウトの長のように、自分は何故超能力者（レベル5）ではないのか？

「……なんでしげるが死ななきゃいけないの？」

ふとした瞬間、出会った年上の男。出会った瞬間に二人は惹かれあい、最初はお互いに暗部の人間だと知らず、知ったらきつと自分を愛してくれなくなると思っていた。だが、樹は変わらずに自分を愛してくれた。自分にとって、間違いなく運命の人だったのに……

「……どうすればいいの？」

少女は誰かに答えをこうようには呟く。

「……しげるがいない世界なんて耐えられないよ」

少女は人知れず涙を流した。すると、どこからか声が聞こえた。

「死ねばいいんだよ」

と。妙に澄んだ、純白な少年の声だった。

「誰！？どこにいるの！？」

モヨコは辺りを探すが姿は見えなかった。そんなモヨコに、

「ここだよ」

と上から声をかけられた。モヨコがそちらを見上げると、ソイツはそこに存在していた。月を背に橋のアーチ部分に腰掛けたその少年。長点上機学園という、学園都市の名門校のブレザーの下に、ファーフードの真っ赤なパーカーを着た黒髪の少年だった。切れ長の瞳と妙に大人びたのである。月を背負っているその姿が似合い過ぎる程に似合い、そこはかとなない不気味さを漂わせていた。その少年は、

「？5点」

と唐突に言い出した。少年の言葉の意味をイマイチ理解出来なかったようにできよとした表情をしていた。少年はハアと、溜め息をつき、

「君と四季崎くんの純愛ごっこに対する評価だよ」

と言った。

「ボクとしてはさ、相手の命を差し出して自分だけが生き残ろうとする、そういう人としての穢れた部分つてのを見たかったんだ。それなのに君達ときたら、お互いのことを庇いあつてさ」

さもつまらなさそうに、侮蔑を含めて少年はモヨコに語る。

「いらないんだよ、そういうの。純愛なら俄然、『君に届け』とか『花より男子』の方が上なんだから。ボクはそっちで間に合ってるんだよ」

少年の言葉は、罵詈雑言とかそういうレベルのものではなかった。モヨコが今まで生きる意味としてきた恋愛に対する全面否定である。ギリギリと齒軋りするモヨコの表情を見て少年は笑顔になり、

「さらに言っならさ、『お互いが死にそうな環境に置かれてるから駆け落ちする』？全くもって意味が分からないね。世の中にはもっ

と苦しい状況に置かれても、それでも愛し合ってる人達がいるんだ。その人達に対して、君達の行動は、侮辱に価するよ」

と、まともで一見筋の通った意見の中に侮蔑を込めて語った。

「だから - 5点だ。実数で表すことすら厚かましいんだよ。君達の行動はさ。ていうか、虚数で表すにしても過大評価だが。兎に角、ボクをあまりガツカリさせないで貰いたいな」

少年はそう言いながら、軽快な動きで立ち上がり、

「まったく。生体観測の為に『アンダーライン滞空回線』と携帯を無理矢理接続したっていうのに。観察対象の片方は、ポンコツを超えたジャンクときたよ」

と、肩を上げ、お手上げと言わんばかりの手振りをした。そして、少年は

「まあ、もう一方は期待以上のものを見せてくれたからこの観察は成功としておこう」

と言ってほくそ笑んだ。そんな少年の言動に、モヨコは怒りを露わにして、

「ふざけるな！！さっきからなんなの！？あなたは！？」

と叫んだ。すると少年は橋のアーチから、まるでそよ風に揺れる木の葉の如く、フワリと少女の目の前に降りてきた。風を操る能力でも持っていたのか？はたまた念動力かなにかか？兎に角少年は、少女倉科モヨコの前に相対した。そうして、

「何って、ボクはただ趣味を楽しもうとしたものの満足度が5割にしか到達しなかったから、少しガツカリしてるだけだが？」

と、至極真面目な顔で答えた。そして、モヨコが何かを言い出す前に、

「そういうことを聞いているのではなくて、ボクの名を尋ねているのなら」

と話し出す。

「ネットでのハンドルネームは『月桂冠』。裏社会での通称は『イスマン非無知者』。魔術と呼ばれる非科学世界での名は オカルトscio050。そ

して-」

少年はモヨコが、今にも噛みつきそうな獅子のように凶暴な表情になっ
てているのを楽しみながら、

「本名は永松大王。ながまつおおきみ情報屋をやっている、しがない能力者だよ」

と言った。その瞬間少女のくすぶっていた怒りは臨界点に達し爆発した。モヨコは、

「ふざけるな!!」

と、激昂して情報屋を自ら名乗る少年永松大王に、拳を握りこんで殴りかかった。大王はそんな様子を他人事のように眺め微動だに
なかった。普通なら拳は、大王の頬骨を抉っていた筈だった。少女
の一撃とは言えども、大王は細身で筋肉が無さそうな虚弱な体系で
あり、大王にとっては致命傷にも成りうる攻撃だった。しかし、
「.....っあ!!」

モヨコの方が逆に呻き声を上げていた。少女の拳は、大王ではなく
彼と自分の間に突如として現れた氷の壁に阻まれたのだ。苦悶を浮
かべたモヨコの表情が、壁の硬さを物語っていた。

「言い忘れてたけど、ボクは身に降りかかる外界からの干渉に対し
て、無意識下の防御が可能だから、そこのとこ悪しからず」

大王は人を食ったような物言いをする。少女はそんな大王を敵意を
持って睨み付けた。が、

「あ.....れ.....?」

視界がどんどん大王から、下へ下へと遠ざかった。そして顔が地面
にぶつかった。顔に激痛が走り、口の周りが真っ赤に染まった。そ
して、顔の激痛の後に、

「嫌アアアア!!」

それ以上の形容し難い痛みが襲いかかった。

足が、足が、足が-痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
思考の中はそれだけで埋められていった。分からなかった。いつ斬
られたのだろう?

-私はいつ両足を斬られたんだ?

太股から先が切断されていた。少女はパニックになり、痛みのおまじに地面にのた打ち回った。だが、そんな状況下であろうとも情報屋の少年は至って冷ややかに、

「これも言い忘れてただけだよさ」

と、話し始める。

「ボクの本名って裏の人間にとっては殺し名と同義語だから。今決めたけど」

そう言いながら、永松は少女を見下すように嘲笑う。そして、少女が自分に対して呪い殺すような視線を向けた瞬間、
グサツ！！

と、氷の棘がモヨコの顎を貫いた。

「うん。自分の本名を殺し名にするのはもうやめよう。自己紹介が不便になる」

大王は、勝手にそう自己完結し、

「そう思うだろ？ 岩見祥吾くん？」

と自分の視線の先にいる男に同意を求めた。そこには、先ほど倉科モヨコの思い人を殺した仮面の死神が刀をぶら下げて立っていた。

「――極めてどうでもいいな」

岩見祥吾と呼ばれた死神の男はそう吐き捨てる。

「そんなことより、どうして殺した？」

岩見祥吾は尋ねる。すると、大王は祥吾の言葉にクスリと笑い、

「本当に君は人に対して『愛する』か『殺す』か『無関心』かしか行動を選べないようだね。今の言動で大体分かった」

と言って

「君はこの娘を『愛する』という選択肢を取ったワケだね」と悟ったように語った。

「そして彼女の恋人である四季崎くんには『殺す』という選択肢を取った。全く君は本当に恐ろしいよ。故に面白いけど」

大王の物言いに、

「さっさと答えろ」

と祥吾は苛立ち始める。

「ああ。そうだったね」

大王はワザとらしくそう言って、

「まあ、一言で言えばボクは合理主義でね。いらなくなったものは邪魔だから、極力排除したいのさ」

と常軌を逸した考えをさも当然のことのように語った。その発言を聞いた瞬間、死神は西洋刀を引き抜こうとした。しかし、

「む？」

西洋刀は抜けなかった。西洋刀の鰐の部分に水が巻き付いて、いくら力を入れても抜けないのだ。

「言わせて貰うが、ここでボクに刃を向けるのは不正解だよ。君はボクに聞きたいことがあるんだろう？」

彼は岩見祥吾にそう、諭すように言った。苛立ちが募り始めていた祥吾だったが、大王の言い分は的を射ていた。そのために彼はあの二人を、さしてイライラもしていないのに殺したのだから。

「なら言え。すぐ言え。今言え。お前の顔を早く破壊したいんだ」

祥吾が刀から手を外し、面倒くさそうに、だが苛立ちながら言った。

「君の中に偏在するフラストレーションを消す方法だっけか？連続殺人鬼の岩見祥吾くん？」

大王は分かりきっていながらも、敢えて尋ねた。

「岩見祥吾。君がボクのところを訪れた時は驚いたよ。全国指名手配中の有名人が学園都市に潜伏していたとは知っていたがまさかボクにあんな事を頼むとは思わなかったからね」

大王は大袈裟に手振りをしながら言った。

「まあ、君にあんな過去があれば当然かもしれないが」と大王は同情するかのよう語る。

「お前のような奴に同情される覚えはないな」

祥吾は吐き捨てる。

「君の過去を色々と調べたり、記憶を探る能力者を雇って色々と調べたからね。そこから君のことは大抵予想出来る」

しかし、大王は語ることを止めない。

「岩見祥吾。20年前に放火魔により家族と死別。12歳の頃、とある人物と出会い西洋刀とビジネススーツと仮面の三点セットを手に入れその放火魔を殺害。それ以来、自分のフラストレーションの赴くがままに人を殺し、いつの間にもやら全国指名手配の犯罪者になつていた。大体こんな感じだよな？君の過去って」

「流石は自称『情報屋』だな」

自分の過去をさも壮大そうに語る大王に対し、祥吾は賞賛し、
「だがさつさと言え。今すぐお前の顔面を破壊したいと言っている
だろ？」

と自分の聞きたいことを答えるようにいった。

「あまり急かすな。君の聞きたいことへの『回答』だからさ」
大王はそう言つて、さらに語り続ける。

「君の人への接し方って、ボクの仮説が正しければ100%、20年前の放火が原因となつていんだよね。君が人を『愛する』のは、家族を失い愛に飢えているからだし、放火によってフラストレーションが溜まり『殺す』という選択肢を取るようになり、放火の後に全てに対して『無関心』だった名残で今でもその選択肢が存在するわけだ」

長々とした台詞を殆ど一息で言う。そして、

「だったら君のフラストレーション、消すなんてお断りだね」
と軽い調子で大王は語った。

・・・・・・・・・・イラッ。

祥吾は青筋を浮かばせる。

「君のフラストレーション、間違いなく今の君の人格形成に一役買つてるよ。だったら消してしまうなんて勿体ない」

大王は祥吾の反応を楽しみながらそう言つて

「ボクは『死神』としての君に『面白さ』を感じているんだからさ。
消すなんて有り得ないよ」

と大王は祥吾を馬鹿にしたように、嘲笑うかのように嬉しそうに語

る。祥吾のピリピリとした殺気を感じると、さらに

「言つとくけど君のフラストレーションを消せないわけじゃないから。学園都市には感情を操る能力者なんてのも沢山いるし、ボクはそついうところにもコネがあるからさ。ここ重要ね」

と明らかな侮蔑を込めて語った。その瞬間、

「もういいや。殺す」

祥吾のフラストレーションが頂点に達した。

「お前の顔面を破壊する！」

と、祥吾は宣言し、かと思えば祥吾の姿がいきなりその場から消失した。もしこの場に、他に人間がいたならば錯乱しかねなかっただろう。祥吾はいつの間にか大王の懐に入り西洋刀で大王の首をなぎにいき、その西洋刀を大王が氷柱のようなものを手に持ち、それを防いでいる状態が形成されていた。大王は氷柱の剣に罅が入っていることに冷や汗をかきながら、

「ねえ」

と祥吾に話かける。

「さつさとお前を斬りたいんだが・・・なんだ？」

と祥吾は西洋刀にさらに力を込めながら尋ねた。大王も氷柱の剣に力を込めながら、

「ボクがさつき放った『断頭奔流』^{ウォーターソウ}、いくつあったと思う？」

と聞いた。

「21だな」

祥吾は素っ気なく答える。

「ボクの『断頭奔流』、マッハ16で水を動かして放ってるんだけどさ、それをそんなにかわすなんてさ、どういうことだよ？」

大王は尋ねる。

「しかもさ、ボクは君が刀を抜けないように水でおさえてた筈なんだけどなんで君はこうして抜いてるんだよ？」

皮肉混じりの大王の言葉に祥吾は何も語らない。

「ていうか、ボクの鋼鉄より硬い氷の防御を力ずくで破った挙げ句

に、同じ硬さの氷の剣を破るなんてさ。君は一体どういう腕力をしているんだい？」

大王がそう尋ねた瞬間、

「お得意の情報網で調べれば？」

と祥吾が口を開いた。そうして、

「イライラすんだよ．．．お前を見ると」

祥吾は明らかに敵意を持って言い放つ。そして刀を一旦引いて、突きを大王に向けて放とうとするが、

「面倒な能力だ」

いきなり辺りに30cm先すら見えない程の濃霧が発生した。

「やめてくれ。岩見祥吾くん．．．．面倒だからシヨウちゃん
で良いかな？」

とどこからか、ふざけた調子の情報屋の声が響いた。しかも先ほどの場所にはいない。祥吾が辺りを探すと、

「無駄だよ。この霧の中じゃボクを探すなんて不可能だから」

と語る。尤も、大王にも祥吾の姿は見えておらず、自分の姿をさがしているのと当てずっぽうで語っているだけなのだ。

「いやあ。君の戦闘スタイル、予想通り近距離型だねえ。ボクの近距離戦闘用の裏技だけじゃ、いつかボクが出てくるし、自動演算による防御も通じそうにない。よって逃げさせて貰うよ」

霧の中から語りかける大王に、

「死ぬがいい」

と祥吾は言った。

「そう言っな。ボクだって君と戦いながら、観察を楽しみたいと思っ
てるけど」

霧から聞こえる祥吾の声はそう語り、

「今は他にも楽しみがある。ここでボクが死ぬのもキミが死ぬのも
惜しいからさ」

と言って、大王は笑った。霧の所為で全く分からないが、確実に笑
ったと祥吾は思った。その瞬間霧が晴れ薄気味の悪い情報屋の少年

はそこから、最初からそこにはいなかったかのように、忽然と姿を消した。それを確認すると祥吾は沸々と湧き上がる憤怒のままに、
「チツ．．．次に会った時は今度こそ．．．お前の顔面を破壊する」
夜の学園都市の中でそう誓った。

「予想通り、いや予想以上だ」

大王は夜の学園都市をピーターパンのように空を舞いながら、岩見祥吾をそう評価した。

永松大王は決して、水的能力と、氷的能力と、念動力を有する多重能力者ではない。彼は『水』に関することなら、状態変化も、運動も、硬度も、純度も操れる万能な水的能力者であるだけなのだ。氷と水の両方を操れるのもその為であり、先ほどの霧も空気中の水の操作で作りに出したのだ。そして、今こうして空を飛んでいるのも普段から、弱点である運動音痴をカバーするために表皮の上に纏っている『水の鎧』、能力によって体をあたかも操り人形のように操作し聖人並みの運動力を誇っているように見せる為の『裏技』を操り、空を飛んでいるだけなのだ。

「盲目の『エアリアル大気支配』、感情の無い『パーフェクトレポート完全移動』、逃げの『アトラクタ万有引力』、スキルアウト『プレッシャースペース圧殺空間』、この街はいくらでもボクを楽しませてくれる！」

心を躍らせながら少年は空を舞い、とあるビルの上に降り立った。
「これだから好きなんだ！！学園都市が！！世界ってヤツが！！」
そう興奮しながら叫ぶ。そうして、

「だからさ、やり過ぎるなよ。君の計画もボクを楽しませてくれるが、もし世界を殺すっていうならさ」

と言つて自分の目線の先にあるビルを、より正確にはそこに住まう
住人を冷たい瞳で睨んだ。

「君の幻想、跡形もなくぶち殺すよ？」

情報屋はそう宣戦布告する。

この街の創設者であり、最も歪んだ存在、『アレイスター』クロウ
リー』に対して -

とある外道の断頭奔流（後書き）

感想など、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4417x/>

【企画】とある創作の学園都市

2011年11月24日21時05分発行